

## 学校法人砂原母の会 砂原保育園 優秀園実践提案研究会開催レポート

2014年6月17日・18日・21日、2013年度ソニー幼児教育支援プログラム優秀園の社会福祉法人砂原母の会 砂原保育園において、優秀園実践提案研究会を開催しました。3日間の公開保育には85名、実践発表・グループ協議・講演には127名の参加がありました。

### 研究会概要

1. 日時：2014年6月17日(火)・18日(水)・21日(土) 10:00～11:00 (公開保育)  
21日(土) 13:00～16:40 (全体会)
2. 会場：社会福祉法人砂原母の会 砂原保育園 (公開保育)  
葛飾区立中之台小学校体育館 (全体会)
3. 主題：「科学する心を育てる」  
サブテーマ：「身近な自然体験が育む豊かな心～雑草山は大きな虫かごだよ～」
4. プログラム (全体会)
  - 1) 13:00～13:05 開会
  - 2) 13:05～13:40 実践発表・総評
  - 3) 13:40～14:40 グループ協議
  - 4) 14:40～14:50 休憩
  - 5) 14:50～16:20 講演「子どもと 自然と 環境と」  
國學院大學教授 神長美津子氏
  - 6) 16:20～16:30 ソニー教育財団常務理事挨拶
  - 7) 16:30～16:40 砂原保育園園長挨拶
  - 8) 16:40 閉会

### 公開保育

#### 「麦わら帽子作り」 5歳児

5歳児は7月から森に行く時に被れるように、麦わら帽子作りに取り組んだ。まずは自分なりにイメージをもち、自分の考えたデザインを紙に起こす。材料は保護者に協力してもらい、様々な素材を集め、自分だけの帽子作りを始めた。初めて使う針と糸、なかなか針に糸が通らないこともあったが根気よく挑戦していた。そして黙々と自分のイメージを形にしていく過程と、子どもたちが意欲的に取り組む様子が見られた。



#### 「生き物との関わり」 3・4・5歳児

4月から、オタマジャクシとカエルの飼育・観察を行っている。子どもたちの生き物への興味は続き、園庭のキンカンの葉に付いていたアゲハチョウの卵を幼虫に孵したり、ザリガニをじっくり観察したり



図鑑と見比べながら違いに気付いたりして飼育をしてきた。3歳児は、アゲハチョウの餌となるミカンの葉を探しに近所に散歩へ行った。

### 「シャボン玉遊び」3・4・5歳児



シャボン玉遊びの大好きな子どもたち。初めはストローだけだったが「もっと大きなシャボン玉を作れないかな？」と自分たちで作った筒やいろいろな素材を工夫して使って楽しいシャボン玉遊びが広がっていった。子どもたちはさらに大きさや形にこだわって筒にタオルを巻いたり、目の粗い不織布を使ったり、ひもを巻いたり、自分なりに考えたり試したりしながら遊びを展開した。

### 「砂と水遊び」3・4・5歳児

4月より砂山を作り、水を流して川を作るというダイナミックな遊びが展開している。5月下旬より「いつも流している水が飛び出してきたら面白いはず！！」という子どもの一言から、「ホースを使って息を吹き込む」という遊びが始まった。長さや太さの違うホースを使って、吹き込む息の量や水の速さ、流れを比べて遊んでいた。



## 研究発表

「科学する心を育てる～身近な自然体験が育む豊かな心～」の主題のもと、園で実施した「森の日」から「園庭に雑草山を作ったら」の実践を発表した。

2011年から始まった「森の日」の活動は今年で4年目を迎える。最初は森での過ごし方が分からなかった子どもたちが定期的に森へ遊びに行くことで、少しずつ自然を感じる心が育っていった。森で発見した虫や草花を保育園に持ち帰ったときに、園庭にも自然を作りたいという保育者の思いもあり、園庭の真ん中に砂山を作った。

砂山を保護者や子どもたちで雑草山に変えていった様子や、緑が出来たことで今までに見られなかった昆虫や草花を見ることができ、自然の営みが身近なところで観察できるようになった。5歳児だけの「森の日」の活動が3,4歳児のそして保護者の興味や関心をも引き出し、今までにない、豊かな自然の学びへと繋がっていった。

## グループ協議

参加者127名が17グループに分かれ、講師 神長 美津子氏に提示していただいた2つの論点についての協議をした。

### 子どもの自然と関わる力

- ・子どものひらめきに寄り添っていき、子どもの思いをどう広げるかが大切である。そして、子どもが遊びを広げる環境も必要である。
- ・今まで自然について学んできたが、自然とは林や森に行くものだと思って



いた。園の中でも身近な小さな自然と触れ合うことができることを学んだ。

- ・保育者の経験が不足していると子どもに伝えられない。保育者も子どもと一緒に楽しむことが大切である。
- ・子どもの視点で活動を進めることで、子どもの興味や好奇心が膨らむ。
- ・子どもが調べたいときに調べられる環境を整えることが大切。
- ・同じ森に何度も行くことによって、季節の変化を感じることができる。
- ・子どもと本物を体験することが大切。

### 心を揺さぶる園生活の背景と仕掛け

- ・子どもが興味をもったことを、心ゆくまでやり続けられる環境がある。そしてそこに寄り添い見守ってくれる大人がいる安心感、友達と一緒に共感してくれる喜びが感じられるからこそ豊かな園生活が送れるのではないか。
- ・子ども同士の寄り合いの中で、今日一日の活動を決めることの大切さを感じた。
- ・大人も子どもと同じ視点で見ることが大切だ。
- ・子どもの言葉や発見を、大人が見逃さないことが大切である。
- ・子どもの考えを引き出す言葉がけを工夫する必要がある。
- ・身近にある自然、ちょっとした素材で遊びは広がると思った。
- ・大人が関わり過ぎず、子どもたちが自分で気づき発見できる環境があることの大切さを感じた。

## 講演

神長美津子氏／國學院大學教授

### 演題「子どもと自然と環境と」

#### はじめに

「子どもと自然と環境と」このテーマは、はじめて砂原保育園に来た時にしぜんに浮かんだ言葉。子どもと自然と環境がうまく融合して、醸し出すハーモニーが感じられた。子どもの自然との関わりを深める環境になっていて、よくできているが無理がない。論文を読み直すと、この園の保育にとって、森にでかけることの意味はすごく大きいと感じる。森には5歳の子どもがでかけているが、5歳の子どもの経験が、園の生活の中に生きていて、他の年齢の子どもたちがその刺激を受けながら園生活を楽しんでいる。



指導計画という視点から見ると、長期の見通しに立った（四季折々の変化や0～5歳児までの成長を見据えたもの）筋の通った縦軸がありながらも、その時期・その月・その週・その日に大切にしたいことの横軸も大切に環境を作っているように感じる。ここの保育には、遠くの見通しに向う縦軸と、この時期に是非とも経験させたいことという横軸がしっかりあり、園長先生や先生方の体にカリキュラムが入っているように思う。そして、長期的な視点では、森にでかけることが大きいのではないかと思う。

#### 「失われた子どもの育ちの機会」と言われる中で 「幼児期の教育」の課題

日本社会の抱えてる問題として「自然体験が少ない」「直接的・具体的な生活体験の不足」「人間関係が希薄」「運動経験が少ない」などの点は、よく言われている。日本の社会の変化（少子化・核家族化・



情報化)の中でそうならざるをえない。しかし、砂原保育園の方やここに参加されている方は、子どもたちの育ちの機会が失われているからこそ、それらを取戻し、危機を乗り越える努力をしているように感じられる。レベルが高いと思う。本日のお迎えの保護者の表情にゆとりを感じ、園に信頼感をもっているという、とても穏やかさがある。

以前初任者研修で「保育室の環境を見直してみよう」という企画をした。「今、保育室内に“自然”と呼べるものがあるか、できるだけたくさん書く」ということをした。するとその答えは、「お花さえもない」というものが多かった。園によっては自然物を保育室の中に持ち込まない、関わる体験が少ないという現実があり驚かされた。

砂原保育園は保育室を見ても、自然に囲まれている。「自然体験が少ない」のが現実であるからこそ保育室は自然、四季を感じるもの、生き物と共に生活することを意図して取り入れていかないと、益々子どもたちの経験は限られたものになってしまう。

### 「幼児期の教育」の課題 体験と言葉の重視など「子どもの育ち」や社会の変化に対応した園生活

5歳児の修了時をイメージした姿としては、  
・体を動かす気持ちよさを体験  
・先生や友達と楽しく食べる  
・自信をもって行動する  
・友達と共に遊ぶ中で、思考力の芽生えを培う  
・話の理解から、言葉による伝え合い  
・表現する過程を大切に  
・体験の多様性と関連性  
が挙げられる。

子どもたちの生活を見直してみると、今の子どもたちは多くの大人に囲まれて生活している。

大人の中にいると、どうしても「もうできたか」「まだできない」「上手くできた」という言葉を言われることが多くなる。子ども自身が「やった!」と充実感をもつとか、“自分を自分で誉める”という大事な機会に恵まれない。何か上手くいった時に大人目、大人の評価を求めてしまう。4歳・5歳・6歳・1年生となっていく時期は、「自分なりにやり遂げた自信」をもつという経験が大切。

「思考力の芽生え」は、まさしく友達と遊ぶ中で生まれるもの。環境との関わりで、子どもたちは、いろいろな試しをするが、それを言葉に置き換えながら自分の考えを深めていくことが大事なこと。思考力を深める時に、「話の理解から言葉による伝え合い」いわゆる「言葉による表現」も、欠かせない体験である。

砂原保育園でしぜんに行われている「家族での活動の振り返り」のひとつは、とても大切な場面と感じた。みんな揃って大勢の中で発表するというイメージではなく、「相手の話しを聞きながら、それを理解し、相手の視点が分かって自分の考えを深めていく、伝えていく」このような体験は小さいうちから大切であり、3、4、5歳と積み重ねの中でできていくものなのと思われる。突然大きい集団の中では難しい、まずは保育者と自分、保育者と2・3人の子どもたち、そして5・6人の集団の中でと、経験としてだんだん積み重なって育っていく。

自分の考えたこと、感じたこと、思ったことを言葉にするのは凄く大事であり、話し合いとして成立していくことが必要、これは、「思考力」に繋がっていく。「話の理解」「言葉による伝え合い」はできてくるのは、まさに日常の積み重ねである。これは、「表現する過程を大切に」というところにも関連している。

小学校でいえば、表現力・思考力・言語力は各教科の中で育てていく時期。乳幼児期から、言葉を覚えて自分勝手に言葉を使う時期から、だんだんに自分の見たこと感じたことを言葉にする時期、話しの理解が深まる中で言葉による伝え合いへと変わっていくことで、言葉が表現する道具となっていく。まさに、乳幼児期は、言葉の発達と表現力と思考力が絡んでくる。

自然と関わる中では、言葉で伝える・見たことを表現する・友達と伝え合い思考力を深めるなどの体験がおのずとできると思われる。

「体験の多様性と関連性」 様々な体験が失われている今、園生活を豊かにしようと、たくさんの体験を持ちこむと子どもたちにとって忙しい毎日になってしまうという現実がある。本当の意味での「豊かな園生活」は、体験と体験が繋がっていくということであり、ある体験が次の活動を生み出していくもの、それが子どもたちの「豊かな園生活」と思う。

#### <写真>大きな葉の下に隠れる子どもの場面「自然と関わる園生活」

自然とのなにげない関わりの場面であるが、それを保育者がどう受け止めるかで子どもたちの経験の質が変わってくる。これを見過ごしてしまえば、子どもたちの心に残らない。受け止めによって、子どもたちの心に残る体験にしていくことが保育者の役割として大切。

#### 「幼児期の教育」とは

国の子ども子育て会議では、「幼児期の学校教育」という言葉を使っている。「学校教育」という言葉は、組織的・意図的・計画的な教育をイメージする方が多い。それらも必要だが、幼児教育では、もっと目の前の子どもに合わせていくこと、無意図的な側面も含んだ形で考えたい。

学齢成熟（年齢がくれば学齢に達するというわけではない、みんなで一緒にひとつの課題を追求することが楽しく、力を付けている）という言葉がある。子どもたち一人ひとりの主体的な活動を促し、自ら必要な経験を積み重ねていくことができるように、環境を構成し、援助を重ねていくことが保育者の役割。

自信をもって学校の生活に入っていくには、幼児期に集団の中で一人ひとりが自己発揮できること、その子の良さや可能性が最大限に開かれてはじめて学齢成熟と言える。みんなでひとつのことを追究することが楽しいという力は、与えて達するのではなく、子どものもっている良さや可能性を最大限に引き出されて、力を付けていくことだと思う。

そのためには、保育者はまず、子どもとの信頼関係が基盤である。

そして、保育の意図的な側面と無意図的な側面を考え、指導の計画性と幼児の主体的側面とのバランスを考えて、適度な環境を作っていくことが大切。それが「幼児理解に基づく保育」である。

学校教育法にある「適度な環境」とは、適切で妥当な環境と言う事、この時期にふさわしい環境を作り出していくことは「適切」であり、子どもたちの生み出した活動に寄り添い、一人ひとりの発達を押しさえた「妥当な環境」も必要になるということ。

また、見通しは、必要だけれど柔軟さも必要という、相矛盾すると思われるものを考えていかなければならない。その為には「子どもの視点を自分の中にもつ」しかない、子どもたちの生み出した活動を子どもの視点で見て、環境を作る。子ども理解の上に、「わくわくドキドキ」するような環境を作り出す工夫が大切。

#### 「幼児理解に基づく保育」とは

「愛情の設計」とは、昭和30年代当時、6領域という言葉が出てきた時の言葉である。解説をされた坂本彦太郎先生は、「6領域に子どもたちの“愛情の設計”がなければいけない」とおっしゃった。「愛情あるまなざし」をもって遊びの計画を立てなければいけない。その結果「わくわくドキドキ」するような環境を作っていくということ。6領域は、教科のような考え方ではなく、子どもたちの生活を

見ながら保育を構成していくこと。「わくわくドキドキ」とは、表面的なことではない。子どもたちの好奇心や興味・関心を引き出すようなものであり、実際に展開されていくときには子どもたちに「愛情の視線」をもって、子どもの視点から環境作りを考えることが大切。

実際には、その保育が展開し振り返ってみると、自分の作った環境と子どもたちの展開した活動の姿にはズレが出てくる。そこでさらに、幼児理解を深めていくことはまさに、子どもの視点から環境を見るということである。

### わくわくドキドキする環境作り

子どもと自然との関わりを促す園環境とは、砂原保育園の雑草山や保護者と育てている稲の様な身近な自然のこと。園全体で自然に関わる園環境がベース、その上に子どもにとって意味をもつ遊具や用具・素材を吟味しながら環境の中に置いていくことになる。「子どもの活動を予想しながら環境を作っていく」「それぞれの発達に応じた環境を工夫していく」ことが必要。

1つ目は、園舎・地域の環境を活かしながら、広い視野から環境を作りだしていくことが大事である。

2つ目の視点は、難しいことであるが、「子どもの視点から」を大事にしたい。

今日も砂場で、隣同士にいながらも楽しんでいることや実現したいことが異なる子どもたちの姿があった。管での遊びに夢中になっている子ども、その隣では、「かちかち」と言いながら砂山をペタペタ固めている子どもがいる。

それを見ると、簡単に「子どもの視点」から遊具を用具を吟味・選択とは言えない。子ども一人ひとり違う。だからこそ、幅をもって、多様な発想を生み出していくような環境の構成が必要とされる。

今日、砂原保育園を見て出ている遊具は、そんなに多くなかった。5歳の女の子が遊具が足りなくなった時に、縁の下の砂場の遊具置き場から取ってきていた（必要な時に必要な物を取ってくる）ができていた。子どもの視点からという、多様だが、数や置き方にも予測を立てながら、子どもが選択できるようにということも大切。簡単に1日で考えるのは難しく、積み重ねの中でできていくものである。

### 「幼児期の教育」の質

ある園長先生が、幼児期の教育は見えない教育、一言でいうと「子どもたちがわくわく（しながら登園して）、どきどき（未知なる環境に出会い、関わりを深め）、きらきらとした（その後の充実感を味わう）生活を送ること」と、おっしゃった。視点としては、

・受容的・安定的関係である。「自分の居場所」「保育者のまなざし」を感じながら、思う存分活動できた。

・環境は、単にそこにあるのではなく、「保育者の意図や願い」が込められている。

・子どもたちの育ちが見てとれる。発達の時期ごとに、その時期らしい発達の姿が見られる。

砂原保育園の本日の家族の話し合いを見ていると4歳の育ち、5歳の育ちを感じることができる。その様なことが発達を保障するということ。

### <写真> 保育園や幼稚園における自然体験

「手に砂がついた」という経験を友達と共有する子どもたちの写真を見ると、「一緒に見合う友達」がいるということも大切だと感じられる。

### 子どもたちにとっての自然

自然は多様、葉っぱ一枚とって見ても、色・形が同じものはない。それは、子どもの多様性に応えて

くれるものでもある。また、そこにその子なりの働きかけがあり、それは大人の目線とも違う、年齢でも違う、その子どもでも時期で違う感じ方を。その時のその子どもの気持ちの在り様を、自然は受け止めてくれる。

自然を感じるものが何もない保育室は、居心地が悪いと思う。本日も、メダカの水槽があったが、生き物を見ている時間は、子どもたちにとってみると、「観察の時間」、「ホッとすること」、「不思議だなと思う場面」など多様な受け止め方である。それが身の周りにあることが大事だと思う。

また、繰り返し関われる環境が大事で、繰り返し関わるからこそ「前とは違う」「変化に気付く」だからこそ「不思議」「どうしてかな？」と感じるわけである。繰り返し関わりながら、その時その時の発見ができることが大切なのだと思う。それが、幼児期の子どもたちにとって好奇心や探究心を引き出し、好奇心・探究心を言葉にしながらかぎや表現力を伸ばす基礎となる。

### 子どもが、「自然と関わる」「自然との関わりを深める」とは

子どもの体験を見ると、「じっと見入る」「環境の中に浸る」「不思議に思う、疑問をもつ」「繰り返し関わりを楽しむ」「試す・確かめる」「言葉にできない感動を味わう」など、自然との関わりは非常に素朴であり、日常的なところで体験している。だからこそ自然環境の在り方が大事。

砂原保育園は大胆さと繊細さを併せもっている。例えば、雑草山を園庭に作るという大胆な発想でありながら、そこで活動する子どものつばやきを拾っていくなどの、子どもの姿を見る保育者の目は繊細である。この様なことは、どこの園でもできるわけではないが、少しでも「自然と出合える・関われる・深められる」その努力は必要なのではないか。

### 「豊かな自然体験」とは

いかにして豊かな自然体験を提供していくか。豊かなとは、多様な自然と多様に関われる体験であり、心揺り動かす体験である。

保育者は、「幼児と出来事」を「幼児と幼児」を繋ぐことが大切。

保育者に期待されていることは、保育者が感性豊かに保ち、自然やその変化に感動するなどの自然を感じる心を磨くことや、子どもとともに自然との暮らしを楽しむこと。

### 自然体験活動における保育者の役割 園環境の自然環境を整える

- ・園環境の整備。ここの園で雑草山を例にすると、カマキリの赤ちゃんを雑草山に放つ、そして成長したカマキリとの出会い、「雑草山は大きな虫かごだね」という言葉が出てくる。この山がなかったら経験できなかったこと、園庭は子どもたちの活動を保障する場でもあり、制限してしまう場でもあるため、できる限り子どもがいろいろな自然と出合える工夫が必要。
- ・テラス・広場・廊下を活用する。「開放的な気分で、子どもたちが必要に応じて自然と関われる環境」「異年齢の子どもたちの共有できる場」「保護者の目にも留まる場」などになる。
- ・保育室の環境の整備。子どもに関心をもたせる。クラスの子どもに広がり、共有へ。子どもたちが必要に応じて関われる、その年齢に相応しい、そして継続的な関わりを可能にする。

### 子どもと自然、友だちや先生、様々な出来事をつないでいくことを意識していくこと

問題は体験と体験をつないでいくことには工夫が必要であるということ。

(例) ある園の4歳児、色水の実践から...

茶褐色になってしまい腐った色水に対して、保育者や友達とのやりとりで、「色水の変化」実感を伴っ



た理解へと繋がり、「色水」や「腐ったもの」など、子どもたちの中に新たな視点・疑問が生まれた。

この例のように、いろいろな体験をもつ子ども同士の考えがぶつかっていくことが大事なこと。「人と関わって学ぶことが楽しい」と感じられるように、ある対象に関わる子どもたちの姿の中には、「協同的な学び」の芽があり、それを繋ぐのが保育者の役割である。

保育者は、一人の子どもと向き合っているが、その周りに集団がいる。一人の子どもと向き合う姿から、その周りの子どもたちを巻きこみ、関わりを深めていく。「人と関わって学ぶことが楽しい」ことを体験することは、学校での教育の基盤にも繋がっていく。

### みんなと話題を共有する環境作り～「今日のニュートン」より～

体験はある意味ではみんなバラバラだが、掲示物で発信することでそれをみんなで共有していくことのできる環境作りをしている。砂原保育園の「今日のニュートン」6月10日の場面、雑草山で見付けた虫、子どもたちが見付けたことを掲示で表している。「今日は見なかったけど、明日見て見ようかな？と見る子どもが広がる」「他にも虫がいないかな？と雑草山を見る目が広がる」など子どもたちの経験を繋ぐ掲示物が大事であると思う。

### まとめ

#### 1.保育者の基本的な姿勢

役割よりも前にある保育者の姿勢が大切、子どもと感動を分かち合うこと、子どもが先に発見したこと、それを分かち合う姿勢が大切と感じる。

子どものこだわりには、無意味に感じることも中にはあるかもしれないが、子どもの後から付いていく。それが好奇心・探究心に繋がる。ということを踏まえた姿勢が大事。

保育者が先に気付いた時も、教えるのではなく分かち合うもの。子どものこだわりの中で無意味に感じることも、前に立たずに子どもの好奇心に、後からついていく姿勢、子ども理解を深めようとする姿勢が大事。

#### 2.保育者の役割

- ・保育者同士、知恵を出し合って、我が園では、どう自然と関わる環境を作っていけばよいか考える。
- ・子どもなりの発見に気付き、それに添った環境の構成。まずは、自分の保育室の環境が、子どもが自然と関わり続けられる環境か？
- ・チャンスを捉えた、必要な助言や掲示物を工夫し発信し、体験と体験を繋ぐ。
- ・子ども同士が学び合う場、お互いの考えにお互いの発見に気付く場作りをすること。
- ・子どもたちが、経験し学んでいることを発信する。

砂原保育園の凄いところは、子どもが学んでいることを常に発信しているということ。

保育室にある掲示物を見ると、相手に合わせた掲示を工夫している。子どもたちに伝えることと保護者に伝えようとしていることが感じられる。

また、発信しながら、保育者自身が保育を振り返っているのではないかと感じる。書きながら、子どもたちの興味・関心がどのように発展してきたのか？などと、子どもたちが経験し学んでいることを整理し確認しているのではないかと感じた。

#### 3.保育者の専門性として期待されていること

保育者自身の感覚・感性を磨くことも保育者の専門性として大切である。



それを、子どもたちに伝えるには、多様な伝え方がある。常に教材等を見直していくことが大切である。子どもと共に歩むこと、

### 今日のニュートンから

雑草山とカマキリの物語。子どもたちが体験したことを保育者がよく理解している。

文の中で「子どもたちも…」と書いているということは自分(保育者)もカマキリに対する同じ思いをもっているということ。まさに、自然と関わる生活の大事さが伝わってくる。

毎日交代で書く中でカリキュラムを共有していることが分かる。園で今の時期に大切にしたいことを、「子どもと共にあるという」視点を砂原保育園の保育から感じさせられた。

### ソニー教育財団常務理事挨拶 樋口謙三氏

論文を書くには…日々の記録を工夫する。まずは「今日のニュートン」4枚書いてみる。

今日のニュートンは、子どもの見取りがよくできている、写真が良い(子どもの姿をよく見ているから撮れる写真)。

砂原保育園は、職員がとても主体的でいきいきしている。先生たちの個性が活きている。

子どもが園での出来事を保護者に話すと保護者が学ぶ、すると園に協力しようとする。そのような素晴らしいサイクルを砂原の保育は見せてくれた。

### 砂原保育園園長挨拶 園長 高橋広美

3日間の公開保育で法人も含め、全部で127名の方に砂原の保育を見ていただけたことに感謝。今年に入って2回目の森の日での発見で、カメムシが臭いことやその属性について知ることができ、更に学びが深まってきている。

2011年3月は東北で大きな事故があった。その3ヶ月後から森の日が始まったが、森の活動をやめるべきか悩んだ。「子どもは今を生きている」という言葉から行きたいと思った。保護者にも確認し賛同していただいた。

「今日のニュートン」という名は、子どもだけでなく大人もそこから何かを発見する、という思いからこのような名前を付けた。「今日のニュートン」の前身はスタッフブログであり当時、園長がブログを書いていたが、1年半後、職員から書きたいと言う申し出があり、「今日のニュートン」が始まった。

公開保育初日、職員から楽しかったという声が挙がった。職員が楽しくなければ子どもも楽しめない、そのことを改めて感じた。

大切な時間を使って参加してくださりありがとうございました。

文責：砂原保育園